報告　一

谷と蘭――陸機「贈潘尼詩」をめぐって

狩野　雄

はじめに

詩を読むと、流れを捉えられず、詩意を汲めず、違和感に苛まれることが多い。しかし、その一方で、詩を読むためには、違和感を抱きながら時間をかけて向き合うしかないとも思う。澱のようなものを解消してゆくのに、手探りしながら何度も繰り返し読む。もしこれも「精読（クロース・リーディング）」と呼んで差し支えないのであれば、それは水を汲みに深く暗い井戸に降りてゆくのに少し似るだろう。その際、階段の一段一段となるのが、作品それ自体を中心として、その作品を取り巻いている幾つもの言葉である。作品を生み出した人の手に成る言葉はもちろん、広い意味での先行研究もここに入る。

本稿では、西晋詩壇に大きな足跡を遺した陸機（字は士衡、二六一―三〇三）が潘尼（字は正叔、二四七？―三一一？）に贈った「贈潘尼詩」を取り上げ、詩の精読の難しさと面白さを、違和感という言葉を端緒としつつ読んでみることとしよう。独りよがりな、単なる迷走を続けた思考の軌跡となってしまわないように気をつけながら、精読の精華たる先行諸注釈との対話を通して考えてみたい。

一、陸機「贈潘尼詩」と作詩の背景

水會於海　雲翔于天　　水は海に會し、雲は天に翔ける
道之所混　孰後孰先　　道の混ずる所、孰れか後にして孰れか先ならん
及子雖殊　同升太玄　　子と殊にすと雖も、同に太玄に升る
舍彼玄冕　襲此雲冠　　彼の玄冕を舍てて、此の雲冠を襲ぬ
遺情市朝　永志丘園　　情を市朝に遺てて、志を丘園に永くす
靜猶幽谷　動若揮蘭　　靜かなれば幽谷の猶く、動けば揮蘭の若し

［芸文類聚巻三十一　人部十五　贈答　陸機「贈潘尼詩」(一)］

［試訳］
川は海に集まり、雲は空を翔ける。

道の混成するなかで、何が後で何が先ということもない。

わたしはあなたと立場が異なることになったけれど、一緒に太玄（道）を目指すのは変わらない。

あなたはあの玄冕（官服）を脱いで、この雲冠（隠士の衣服）を身に着けることとした。

世俗に対する気持ちをうち捨てて、隠遁への思いをずっと持ち続けるのだ。

そんなあなたが静かにしている様子はまるで深い谷のようで、動くさまはあたかも蘭が香りを放つようだ。

冒頭の自然の理を詠じた対句「水は海に會し、雲は天に翔ける」から始まったこの詩は、後半の三組と合わせて四組の対句を抱えている。この対句群に支えられ、理を説くように詩は進んでゆき、説かれるその理は一見すると明らかなようである。この意味において一読して大意が取れない詩ではないのであるが、筆者にはある種の違和感が残った。第十句「志を丘園に永くす」までと第十一・十二句「静かなれば幽谷の猶く、動けば揮蘭の若し」に「段差」を覚えたのである。詩のメッセージとしては第十句までで終わっても良いように思われるのだが、末尾に「静かにしている様子はまるで深い谷のようで、動くさまはあたかも蘭が香りを放つようだ」と、やや思わせぶりにも感じられる二句が付け加えられている。詩題から推して谷と蘭を用いて潘尼の人となりを詠じていることは知られるし、後世に「空谷幽蘭」と言えば隠士の徴となるのではあるが、この詩のなかで陸機の想いとどう繋がるのかがいま少し分明ではない。この詩を贈って陸機は何を伝えたかったのだろう。

例えば、劉運好『陸士衡文集校注』は巻五「贈潘尼」の題解で『晋書』の陸機伝と潘尼伝を引いて、この詩の背景と動機について次のように言う。

《晉書・陸機傳》：『趙王倫輔政，引為相國參軍。豫誅賈謐功，賜爵關中侯。倫將簒位，以為中書郎。』又《潘尼傳》：『及趙王倫簒位，孫秀專政，忠良之士皆罹禍酷。尼遂疾篤，取假拜掃墳墓。』遂隱居故里。趙王倫簒帝位在永寧元年正月，四月被誅，此詩蓋作於永寧元年（公元三〇一）初。故詩言吾與潘尼雖如水海雲天，顯隱有異，然同歸於道，無後無先，後又讚美潘生遺情市朝，隱居山林。詩人之歸隱之意見於言外。

〔劉運好『陸士衡文集校注』巻五「贈潘尼」題解〕

政治情況が険しさを増すなかで潘尼は職を辞した。このため、職に留まっている詠じ手陸機とは、川の水が海に向かって流れ、空の雲が天を翔けるように、人生の道行きを異とすることとなった。それでも、最後は同じところに帰ってゆくように、自分たちも同じところ、すなわち道に辿り着くのだと言っている、という。このほか、該詩を詠む前提としては、すでに先行研究が明らかにするように、敗戦国の人間の立場で西晋王朝に出仕することとなった陸機・陸雲兄弟と、中原出身の潘尼との間に育まれた濃やかな友情の存在が欠かせない[二]。まずは、この詩がこうした情況の下で生み出されたことを確認しておこう。

二、王夫之『古詩評選』の評と諸注釈
――「贈潘尼詩」を読む（1）

（1）王夫之『古詩評選』の評

「贈潘尼詩」は『文選』に採られなかったこともあり、これまで多くの注目を集めてきたわけではないようである。右に題解を引用した劉運好『陸士衡文集校注』は、各作品の末尾に「集評」の項を設けており、歴代の評を載せているが、評が施されているのは、やはりと言うべきか、『文選』に収められた作品の方が圧倒的に多い。ここにも六朝の詩、文学を考える上での本質的な問い――資料の制約のなかでどのように読むかという問題が横たわる。[三]

「贈潘尼詩」に関しては、その「集評」でも清の王夫之『古詩評選』の評を載せるばかりである。[四] ただ、わずか一つではあるが、王夫之の評は、該詩を読む上でなかなかに示唆的である。

詩入理語惟西晉人爲劇。理亦非能爲西晉人累、彼自累耳。詩源情、理源性、斯二者豈分轅反駕者哉。不因自得、則花鳥禽魚累情尤甚、不徒理也。取之廣遠、會之清至、出之修潔、理顧不在花鳥禽魚上邪。平原玆制、詎可云有注疏帖括氣哉。（詩に理語を入るるは、惟れ西晉人劇しと爲す。理亦た能く西晉人の爲に累ぬるに非ず、彼れ自ら累ぬるのみ。詩は情を源とし、理は性を源とす、斯の二者豈に轅を分かちて駕を反す者ならんや。自得するに因らざれば、則ち花鳥禽魚、情を累ぬること尤も甚だし、徒だ理のみならざるなり。之を廣遠に取り、之を清至に會し、之を修潔に出だせば、理は顧に花鳥禽魚の上に在らざらんや。平原の玆の制、詎ぞ注疏帖括の氣有りと云う可けんや。）

〔王夫之『古詩評選』巻二　四言　陸機「贈潘尼」〕

「詩に理語を入るるは、惟れ西晉人劇しと爲す」と王夫之はこの詩に関する評を始め、続けて西晉詩人の手に成る詩篇は理屈が鼻につくというが、詩は情と理をともに具えることが重要なのだと自説を展開した上で、「平原の玆の制、詎ぞ注疏帖括の氣有りと云う可けんや」と結んでいる。王夫之の評からは、この時期（あるいはそれ以前）に、陸機も含む西晉詩歌一般に対して、注疏や帖括（経典の難語句）のような理屈ばかりが並べられているという批判があったことが窺われる。確かに、「贈潘尼詩」にも説理の一面が色濃くあり、『古詩評選』から窺知されるこの詩に対する批判がまったく的を外したものであるとは言えないところがあるが、敗戦国の人間として入洛した陸機にとって潘尼は数少ない知友であり、その人へ贈った詩である。理が勝ちすぎるという欠点がこの詩を含めた西晉の詩歌にあるにしても、いま少し、詩それ自体から、事柄の先にある（はずの）情を読み込む、読み出すことはできないものであろうか。王夫之が陸機の四言詩としてこの一首を取り上げて論じ、固い理屈ばかりではないと述べたことも含め、情がいかように表現されているかを考えてみたい。その際によすがの一つとなるのが、詩人も目にしたであろう先行用例であり、それらを吟味して編まれた注釈である。続いて、諸注釈書の「贈潘尼詩」についての注釈を見てみることとしよう。

（2）「贈潘尼詩」に施された諸注釈

この詩はこれまでどのように読まれてきたのであろうか。陸機の詩歌全体に校注を施した書籍で、筆者の手元にあるのは以下の六点である。[六]

郝立權『陸士衡詩注』人民文学出版社、一九五八年
金濤聲『陸機集』中華書局、一九八二年[七]
佐藤利行『陸士衡詩集』白帝社、二〇〇一年
王德華『新譯陸機詩文集』三民書局、二〇〇六年
劉運好『陸士衡文集校注』鳳凰出版社、二〇〇七年
楊明『陸機集校箋』上海古籍出版社、二〇一六年

これらの注釈書は今日のわれわれが陸機「贈潘尼詩」を読む際に導き手となってくれるものである。紙幅に限りがあるので、本稿では主として筆者が感じた「段差」を含む、第九句から第十二句の四句に焦点を当てて考察を試みることとするが、第一句から第八句に施されている諸注釈にも読者を陸機の詩の世界に誘う指摘が多くなされている。

例えば、初めの二句「水は海に會し、雲は天に翔ける」に各注釈が指摘するのは、『尚書大傳』（郝氏・佐藤氏・劉氏）、『毛詩』小雅「沔水」（楊氏）と『易』需卦（郝氏・佐藤氏・劉氏・楊氏）である（王氏『新譯陸機詩文集』はここには注を施していない）が、郝氏の『陸士衡詩注』と佐藤氏の『陸士衡詩集』では、左思「呉都賦」（『文選』巻五）の「百川派別し、海に歸して會す」から引用され、次いで李善注に見える『尚書大傳』が指摘されており、「三都賦」をめぐる陸機自身の逸話も含めて詩人の抱いたイメージが想起されるようになっている。[八]また、劉氏の『陸士衡文集校注』では、『京氏易傳』を出典として指摘しつつ、「需とは、待つなり」までを引用している。いずれも、陸機と潘尼二人の道行きは異なっても帰するところは同じであるとする詩意を読者に示すものである。

それでは、第九・十句に施された注を見てみよう。

［第九・十句　遺情市朝　永志丘園］

《郝注》

［四］曹植洛神賦。遺情想像。史記孟嘗君傳。過市朝者掉臂而不顧。蔡邕處士圈叔則碑。潔耿介于丘園。

［郝立權『陸士衡詩注』巻四「贈潘尼」］

《佐藤注》

5　遺情市朝、永志丘園

［遺情］思いを絶ち切る。

［市朝］市と朝。人の群がる所。俗世間をいう。陸機の「門有車馬客行」に「市朝は互ひに遷易す」とある。

［丘園］丘にある花園。隠居の地をいう。『周易』賁卦・六五に「賁于丘園、束帛戔戔」（丘園を賁る、束帛戔戔たり）とある。

［佐藤利行『陸士衡詩集』下巻「贈潘尼」］

《王注》

⑥遺情　無情；無動於衷。
⑦市朝　指人多會集的地方。

⑧永志　指永遠的致力於。

⑨丘園　丘墟；園圃。

〔王德華『新譯陸機詩文集』巻七「贈潘尼」〕

《劉注》

〔5〕遺情，忘情。《抱朴子・外篇・君道》：『誅戮則遺情任理，不使鴟夷有抱枉之魂。』市朝，集市與朝廷。鮑照《結客少年場行》：『日中市朝滿，車馬若川流。』丘園，代指隱士所居之處。《抱朴子・外篇・嘉遁》：『僕所以逍遙於丘園，歛跡乎草澤者，誠以才非政事，器乏治民。』此二句言忘情於集市朝廷，長志隱居田園山林。

〔劉運好『陸士衡文集校注』巻五「贈潘尼」〕

《楊注》

〔六〕遺情二句：遺情，忘情，遺忘情累。市朝，市場與朝廷。周禮天官內宰「凡建國，佐后立市」鄭玄注：「市朝者，君所以建國也。建國者必面朝後市。」史記張儀傳：「爭名者於朝，爭利者於市。今三川，周室，天下之朝市也。」志，論語述而「志於道」何晏集解：「慕也。」周易賁六五：「賁于丘園。」

〔楊明『陸機集校箋』巻五「贈潘尼」〕

第十句の、官を辞して潘尼が向かおうとする「丘園」については、『周易』賁卦が二つの注に指摘されるほか、数種の用例が挙げられているものの、隱士のいる、世俗を離れた場を表す語ということでは一致している。ただ、前句の「遺情」については、「情を遺(のこ)す」意となる曹植「洛神賦」を引く郝氏の注と、「思いを絶ち切る」「心を動かさない」「情を忘れる」意とする佐藤・王・劉・楊四氏の注とで多少異なる。郝注に従えば、第九・十句は、思いを世俗に遺しつつ（それを振り捨てて）帰隱してゆく意となる。こうしたある種の揺れは潘尼の心にも生じたものと想われるが、諸注釈を重ねてみることでこの読みが浮かび上がってくるのは興味深い。続いて、第十一・十二句に施された注を見てみよう。

［第十一・十二句　靜猶幽谷　動若揮蘭］

《郝注》

〔五〕詩小雅。出自幽谷。猛虎行。靜言幽谷底。意與此同。

《佐藤注》

6　靜猶幽谷　動若揮蘭

〔幽谷〕奥深い谷。『毛詩』小雅・伐木に「出自幽谷、遷于喬木」（幽谷自(よ)り出でて、喬木に遷る）とある。

〔揮蘭〕蘭を揮うように、その動きの輕やかなことをいうか。

《王注》

⑩幽谷　深谷。

⑪揮蘭　散發出蘭草的香氣。揮，散；散發。

《劉注》

〔6〕幽谷，深谷。《詩・小雅・伐木》：『出自幽谷，遷於喬木。』毛詩傳：『幽，深。』此指幽靜的山林。揮蘭，散發蘭花馨香。《後漢書・荀彧傳》：『權詭時偪，揮金僚朋。』李賢注：『揮，散也。』此二句言寧靜時猶如幽靜的山林，行動時散發蘭花的馨香。

《楊注》

〔七〕揮蘭句：謂散發蘭馨。文選曹植七啓「揮流芳」李善注引

韓康伯周易注「揮，散也。」

郝・佐藤・劉の三氏はいずれも第十一句の「幽谷」に注をして『毛詩』小雅「伐木」を引いている。最新の楊氏の注が「幽谷」に触れず、王氏注が「深谷」と語義のみを示して「伐木」を引かないのは、おそらく自明なこととしているのであろうが、三氏が「伐木」を引くのは、「幽谷」という言葉が用いられているのはもちろんのこと、『毛詩』「伐木」が友を求める友情の詩であることを重く見てのことだと考えられる。

「伐木」には注に引用されている「幽谷自り出でて、喬木に遷る」に続いて、「嚶其鳴矣　求其友聲（嚶として其れ鳴く、其の友を求むる聲あり）」の二句があり、ここに附せられた毛伝には「君子雖遷於高位、不可以忘其朋友（君子は高位に遷ると雖も、以て其の朋友を忘るべからず）」と見えており、立場が異なることとなっても変わることのない友情が詩の主題として詠じられていることが知られる。[九] この意味において、政治状況の転変に翻弄されて出処を違えることとなり、友情を胸に抱きながら別れを告げている「贈潘尼詩」には、相応しい典故となるのである。字数の制限もあってのことだろう、濃淡さまざまあるが、三氏の注を通して、友へ厚い友情を捧げようとする陸機の声が聞こえてくるような心地がする。

次に濃淡に目を向けてみれば、その態度がそれぞれに少しずつ異なっていることに気がつく。郝氏の注は、『毛詩』「伐木」を指摘した後で、陸機自身の「猛虎行」の一句「幽谷の底に靜言し」を引き、「意は此と同じなり」とする。これに対し、佐藤氏の注は、「伐木」の二句を引くのみで、あえて語の典拠の指摘を行なうのに止めているように見える。そうして、劉氏の注は「幽谷は、深谷である」と解いてから、「伐木」の二句に続けて毛伝の「幽は、深なり」を引いた上で、「これは幽靜（奥深くて静か）な山林を意味する」と語句の意を示す。劉氏の注の体裁は二句ごとに詩句の意を示すというものであるが、そこでも「この二句は、寧靜（落ち着いて静か）な時にはあたかも幽靜な山林のようであり、行動する時には蘭花の馨香（よい香り）を発するのだ、ということを言っている」とする。

これらはすべて語の出典を踏まえたものであるが、劉氏注の、「幽谷」を「幽靜的山林」とする解釈には従いがたいところがある。単にやや不用意であったのだとも思われるが、ここで「谷」の字を省いてしまうのは、「伐木」の典故を踏み外すことになりかねず、また、後述するように陸機の想いを掬い損ねる可能性があると考えるからである。劉運好氏の校注は該博詳細であり、陸機の作品を読む際には座右に備えるべき一書であるが、この詩の、特に第九句以降の注釈に関しては、「遺情」「市朝」「丘園」を解くのに掲げた用例がいずれも陸機に後れるものであることも含め、問題がないとは言えない。おそらく、第十句の意を「長く田園山林に隠居することを志す」としたことと関係しているのであろう。あえて忖度するに、劉氏の中で田園山林に隠居する潘尼をイメージしたときに、第十一句の「幽谷」が奥深い山林として立ち上がってきたのではないだろうか。これを完全に錯誤であるとすることは筆者にはできないが、精読の精華である注釈書においてもイメージの横滑りのようなものが起こり得ることは指摘しておきたく思う。

いま先行する諸注釈に導かれて、第十一句に陸機の潘尼に対する変わらぬ友情が詠み込まれていることを見てきたが、それは第十二

句にはどのように承け継がれているのであろうか。本稿冒頭にも述べたように、この詩は四組の対句によって支えられており、末尾の両句もまた対句を成している。このことを視野に入れつつ、第十二句に附せられた注釈を見てみることとしよう。

「揮蘭」に関しては、郝氏の注は触れず、佐藤氏の注はその意を「動きの軽やかなことをいうか」と推測し、王氏の注は蘭草の香気を放つと語意を述べ、劉氏の注は『後漢書』荀彧伝に見える「揮」に李賢が「散也」と注していることを引きながら「蘭花の香りを発散する」と解き、[二〇] 楊氏の注は、蘭の馨りを発散することを言っているとした上で、曹植「七啓」に見える「揮流芳」という表現に李善注が挙げた韓康伯の『周易注』「揮、散也」を引いている。これら第十二句に施された注釈からは、第十一句に認められたようには友情を読み出すことができないのであるが、果たして友情は詠み込まれていないのであろうか。五氏の注釈を筆者が正しく理解できていないだけのようにも考えるが、とにかくまだ、第十一・十二句が対を成す二句として意味するところが十分には見えてこないように思う。このように、諸注釈に拠りながら読もうとしても、十分に詩意が取れていないように感ずることもある。注釈に対する自らの誤読を懼れつつも、詩を読んでいくにはほかの手立てを講じなければならない。

「幽谷」について郝氏の注が陸機の「猛虎行」の一句を引いて、「意は此と同じなり」としていた。また、第九句の「市朝」について、佐藤氏の注が陸機の「門有車馬客行」の一句を引いていた。これまでも多くなされてきた、共通する詩句を響き合わせて理解を深めるべく、注釈に詩人自身の別の作品を引く手法である。

実際、詩を読んでいて一篇のみでは分明とならないことが実にしばしばある。これは六朝詩に限ったことではないであろうが、資料的な制約の強い六朝詩にあってはやはり、当該詩人の他の作品も視野に入れて、詩歌作品全体に湛えられている情志のつながりを探ることで精読を考える姿勢があってしかるべきであろう（本来的にはこれこそが最初に採られるべき方法なのであるが）。加えて、今回取り上げた詩は贈答詩であり、そもそもが複数の人間の関係性において成立するものであった。陸機と潘尼のやり取りを思念のうちに置いてこそ、この詩の精読は立ち上がってくるのではないか。ここからは、贈答詩であることも踏まえつつ、陸機の詩における「幽谷」と「揮蘭」がいかなる意味・イメージを有しているのかについて考えてみたい。

三、谷と蘭――「贈潘尼詩」を読む（2）

（1）陸機の「谷」

陸機詩に見える「幽谷」の用例を辿ってみることから始めよう。郝氏の注が挙げた「猛虎行」には、「高山の岑」で「長嘯す」るのと対比的に深い谷の底で静かに物思う姿が詠じられている。

静言幽谷底　　幽谷の底に静言し
長嘯高山岑　　高山の岑に長嘯す

〔文選巻二十八　陸機「猛虎行」〕

「靜言幽谷底」の句に李善は、「毛詩に曰く、靜かに言に之を思う、と。又曰く、幽谷自り出づ、と」と注している。「靜言思之」は、邶風の「柏舟」と衛風の「氓」に見える。「幽谷」はさらに、「贈馮文羆遷斥丘令」詩にも見えており、そこでは、自らを幽谷から現れた者として陸機は詠じている。

嗟我人斯　戢翼江潭　　嗟我人なる、翼を江潭に戢む
有命集止　飜飛自南　　命の集る有り、飜飛すること南自りす
出自幽谷　及爾同林　　幽谷自り出でて、爾と林を同じくす
雙情交映　遺物識心　　雙情は交ごも映らし、物を遺れて心を識る

〔文選巻二十四　陸機「贈馮文羆遷斥丘令」〕

この詩は、安平出身の馮熊（字は文羆）に贈ったものであるが、「南」の「江潭」から飛び、「幽谷」から出て、あなたと同じ林にやってきたのだ、という。陸機がこの詩で用いる「幽谷」には故郷のニュアンスが含まれているのが窺われる。こうした点を踏まえつつさらに陸機の詩歌作品を読んでゆけば、従兄の陸曄（字は士光）に贈った作品中に故郷に関わる川として「谷水」が詠まれているのが見出される。

髣髴谷水陽　　谷水の陽を髣髴し
婉孌崐山陰　　崐山の陰を婉孌す
營魄懷茲土　　營魄は茲の土を懷い
精爽若飛沈　　精爽は飛沈するが若し

〔文選巻二十四　陸機「贈從兄車騎」〕

「谷水の陽を髣髴し、崐山の陰を婉孌す」に施された李善の注には、陸道瞻の「呉地記」が引かれ、「長谷」なる場所が陸機にとっての父祖の地であることが記されている。

陸道瞻呉地記曰、海鹽縣東北二百里有長谷、昔陸遜・陸凱居此。谷東二十里有崐山、父祖葬焉。（陸道瞻の呉地記に曰く、海鹽縣の東北二百里に長谷有り、昔陸遜・陸凱此に居す。谷の東二十里に崐山有り、父祖焉に葬らる、と。）

〔文選巻二十四　陸機「贈從兄車騎」李善注〕

祖父陸遜と従伯父陸凱が居を構えた地として「長谷」は記され、詩にも詠まれている谷の東にある崑山に父祖が眠るという。詩中の「茲の土」は陸遜の一族の故地であり、「茲の土」を懷う「營魄」は魂であるから、ここで陸機は遠く離れた故郷を強く念じているということになる。

また、『太平御覧』にも「呉地記」が引かれ、そこにはこの「長谷」の名が「華亭谷」であることが記されている。この「華亭」こそは、「華亭鶴唳」の熟語で知られる陸氏の故地にほかならない。[二二]続けて引かれている「呉志」も併せて掲げることとしよう。

呉地記曰、云陸氏宅在長谷。谷在呉縣東北、谷名華亭谷、水下通松江。昔陸遜・陸凱居此谷。呉志云、漢廬江太守陸康與袁術

有隙、使姪遜與其子績率宗族遠此避難、居于是谷。谷東有崑山、父祖墓焉。故陸機思郷詩、髣髴谷水陽、婉孌崑山陰。（呉地記に曰く、陸氏の宅は長谷に在りと云う。谷は呉縣の東北に在り、谷の名は華亭谷といい、水は下りて松江に通ず。昔陸遜・陸凱此の谷に居す、と。呉志に云う、漢の廬江太守陸康 袁術と隙有り、姪の遜と其の子の績とをして宗族を率いて此を遠ざかりて難を避け使め、是の谷に居す。谷の東に崑山有り、父祖 焉に墓す。故に陸機の思郷詩に、谷水の陽を髣髴し、崑山の陰を婉孌す、とあり、と。）〔太平御覽巻一百八十　居処部八　宅〕(一三)

「幽谷」や「谷」に陸機にとっての故地の意味を含むことがあるのを見たが、「贈潘尼詩」を読むという点においても同様に考えることができるのではないか。こうした視点はこれまで見てきた「谷」に関する用例にのみ支えられるのではない。対句として「贈潘尼詩」の第十二句に詠み込まれていた「揮蘭」と支え合うかたちではじめて可能となる。続いて、陸機詩歌に見える「蘭」の持つ意味について考察を試みることとしよう。

（2）陸機の「蘭」

筆者は西晋詩歌に見える「蘭」字の使用状況について調査・検討をしたことがある。個々の用例を掲げる、もう少し詳細な検討については別の機会に譲ることとしたいが、いま逯欽立輯校の『先秦漢魏晋南北朝詩』で西晋に分類される、傅玄以降の詩人の詩歌作品中に見える「蘭」字の使用状況について概要を述べれば、以下のようになる。

使用した詩人は十八名で、用例総数は六十八、内訳は、中原出身者が十四名で四十例、孫呉出身者が四名で二十八例。わずか四名（うち一名は一例）で用例全体の四割を超えるのであり、使用例の多さからも孫呉出身人士の「蘭」への想い入れを十分に読み取れるのであるが、用い方にも南北の差が認められるように思う。

「秋蘭」や「蘭皐」、語らいが蘭のように芳るといった、『楚辞』や『周易』繫辞伝、古詩を踏まえたと思われる表現は、北にも南にも共通して見られるが、陸雲「贈顧尚書」詩に「此の蘭茝を玩ぶ」「我が蘭既に馥り」と詠じられていることに象徴されるように、南方孫呉出身者には「蘭」を自分や自分と親しい人々に共有されるものとして捉えるという傾向がある。それは、小南一郎氏が指摘される、呉楚の出身者に見える、『楚辞』をわが文学とする姿勢と通底するものであるだろう。(一四)

全体としても、同じ「蘭」の字を用いながら、思い描くイメージは孫呉出身者と中原出身者で異なっているわけであるが、これは、中原（北地泥陽）出身の傅玄の手に成る「擬四愁詩」其二に多くの南方の景物が詠じられ、そこに「蘭蕙草」の語が見えていることに最も象徴的に表れているとも言えよう。中原出身の人士から見れば、「蘭」は南方の産物として括られるものだったのである。南北人士による「蘭」の表現は、言葉がそれぞれの文化的背景において紡がれる好例と言えそうだが、文化的背景の基盤には気候風土が抜きがたくあるのであり、植物に関する表現には否応なくこの点が滲むことも映し出している。

こうしたこととともおそらくは相俟って、「蘭」を贈答詩に詠む場合、南北を越えて詠まれる数が多くないという特徴がある。北方人士の手に成る贈答詩十五例(一五)のうち、孫呉人士に贈ったり答えたりしたものは三例で、いずれも対象が陸機である。一方の南方人士の場合も同様の傾向となる。八例を数える陸雲は題名を失した二首を除いてすべて贈答詩の用例であるが、いずれも孫呉の人士に宛てたものであり、すべて贈答詩中に用いている鄭豊と孫拯も同じである。一人陸機だけは例外で、十三例のうち、楽府が四例、擬古詩が四例、招隠詩が二例あって、残りの三例が贈答詩であるが、いずれも中原出身者へ贈っており、その一例が「贈潘尼詩」の第十二句である。つまり、陸機という存在を介して西晋時期の南北出身者の「蘭」表現は贈答されていたということになるのである。ただ、確かに異例なのではあるが、陸機もまた全体としてはやはり自らに近しいものとして「蘭」を捉えており、用例から窺える「蘭」への想いは、陸雲をはじめとする孫呉人士と基本的には変わらないように見える。

右に北方中原人士が南方出身の陸機に贈った「蘭」が三例あることに触れたが、そのうちの二つが潘尼によるものである。「蘭」をめぐる陸機と潘尼との関係は、今回取り上げた「贈潘尼詩」に止まらないのであった。「贈潘尼詩」に対する返答と思われる潘尼「答陸士衡詩」の冒頭に「蘭」が詠み込まれている。

顧茲蓬蔚　廁根蘭陂　　茲の蓬蔚を顧みて、根を蘭陂に廁う
膏澤雖均　華不足披　　膏澤均しと雖も、華は披くに足らず
逮春不茂　未秋先萎　　春に逮ぶも茂らず、未だ秋ならずして先に萎る
子濯鱗翼　我挫羽儀　　子は鱗翼を濯い、我は羽儀を挫く
願言難常　載今載離　　願言常なり難く、載ち今載ち離る
昔遊禁闥　祗畏夕惕　　昔禁闥に遊び、祗だ夕惕を畏る
今放丘園　縱心夷易　　今丘園に放たれ、心を縱ままにして夷易なり
口詠新詩　目玩文跡　　口には新詩を詠じ、目には文跡を玩ぶ
予志耕圃　爾勤王役　　予は耕圃に志し、爾は王役に勤む
慙無琬琰　以詶尺璧　　琬琰の以て尺璧に詶ゆる無きを慙ず

〔芸文類聚巻三十一　人部十五　贈答　潘尼「答陸士衡詩」〕

冒頭に「茲の蓬蔚を顧みて、根を蘭陂に廁う」とあるのは、陸機の「贈潘尼詩」を承けたものであろう。第七・八句「子は鱗翼を濯い、我は羽儀を挫く」、第十七・十八句「予は耕圃に志し、爾は王役に勤む」に、陸機（子・爾）と潘尼（我・予）の置かれる状況が対比的に詠じられているのも、「贈潘尼詩」と対応すると考えられる。さらにこれより以前、陸機が呉王郎中令となる際に潘尼が贈った「贈陸機出爲呉王郎中令」其六の冒頭にも「蘭」字が用いられている。

昔子忝私　貽我蕙蘭　　昔子私を忝くし、我に蕙蘭を貽る
今子徂東　何以贈旃　　今子東に徂くに、何を以て旃に贈らん

〔文選巻二十四　潘尼「贈陸機出爲呉王郎中令」〕

「昔子私を忝くし、我に蕙蘭を貽る」。潘尼は陸機から「蕙蘭」を贈られたと詠んでいる。この「蕙蘭」については、五臣注で張銑が

「蕙蘭は、香草、以て文章の美なるを喩う」と解いているのに従って、先行研究においても概ね「香り高い詩」といった意味で解されてきた。

善曰、陸集有贈正叔詩。銑曰、陸先贈潘詩、故云忝私。情於我而貽我蕙蘭也。蕙蘭、香草、以喩文章之美。（善曰く、陸集に正叔に贈る詩有り、と。銑曰く、陸先に潘に詩を贈る、故に私を忝くすと云う。我に情ありて我に蕙蘭を貽る。蕙蘭は、香草、以て文章の美なるに喩う、と。）

〔六臣註文選巻二十四　潘尼「贈陸機出爲呉王郎中令」〕

筆者もこの解釈に同意したく思うが、ここでは「蕙蘭」をいかように解くかということ以上に、陸機と潘尼との間に明確に意識するかたちで「蘭」のやり取りがあったことを指摘しておきたい。張銑がその前に「陸先に潘に詩を贈る、故に私を忝くすと云う」と述べているが、「贈潘尼詩」に見える「蘭」表現も、この文脈の上に置いてみる必要があるのである。

そうして、「蘭」を起点にして陸機の詩歌を読み直してみれば、そこには谷とともに詠じられている表現があることに気づく。擬古詩の「擬渉江采芙蓉」第二句には「穹谷に芳蘭饒し」、深い谷に芳しい蘭がたくさん生えている、とあり、楽府の「悲哉行」第九句には「幽蘭通谷に盈ち」、奥深いところに生える蘭が深い谷いっぱいに満ちていて、とある。

上山采瓊蘂　　山に上りて瓊蘂を采る
穹谷饒芳蘭　　穹谷に芳蘭饒し
采采不盈掬　　采り采れども掬に盈たず
悠悠懷所歡　　悠悠として歡ぶ所を懷う
故鄉一何曠　　故鄉　一に何ぞ曠かなる
山川阻且難　　山川　阻にして且つ難し
沈思鍾萬里　　沈思　萬里に鍾まり
躑躅獨吟歎　　躑躅して獨り吟歎す

〔文選巻三十　陸機「擬渉江采芙蓉」〕

幽蘭盈通谷　　幽蘭　通谷に盈ち
長秀被高岑　　長秀　高岑を被う
……
寤寐多遠念　　寤寐　遠念多く
緬然若飛沈　　緬然として飛沈するが若し
願託歸風響　　願わくは歸風の響きに託し
寄言遺所欽　　言を寄せて欽う所に遺らん

〔文選巻二十八　陸機「悲哉行」〕

これらの作品には、後半に「故鄉一に何ぞ曠かなる、山川阻にして且つ難し」「願くは歸風の響きに託し、言を寄せて欽う所に遺らん」などとあるように、陸機の望鄉の思いが強く詠じられている。谷と蘭のイメージは、陸機や陸雲にとって――おそらくは多くの孫呉出身人士にとっても、故鄉を想わせる特別なものであったわけであるから、実につきづきしいかたちで詠み込まれていると言える。このことを確認した上で改めて「贈潘尼詩」の末尾の二句「靜かな

れば幽谷の猶く、動けば揮蘭の若し」に視線を戻してみよう。

人生の道行きを異にすることとなった年長の友人に贈った詩の末尾に、孫呉人士たる自分にとって大切な語を用いて、その人を喩えている。右で触れた潘尼の「贈陸機出爲呉王郎中令」詩に陸機が答えて贈ったと考えられる「答潘尼詩」に「於穆（ああ）たる同心」「彼の美たる潘生、實に我が心を綜ぶ」などとあることを併せ考えると、陸機や陸雲は、潘尼に対して心から理解し合える感覚を有し、どこか懐かしさにも似た感情を抱いていたのではないかとさえ思われる。[一六]

「贈潘尼詩」の末尾の二句は、陸機のなかの、たとえ歩む道が違っても潘尼への信頼・友情が揺らぐことはないという想いを、孫呉出身の詩人ならではの表現で伝えようとしたものだと考えたい。第五・六句の「子と殊にすと雖も、同に太玄に升る」という表現と響き合い、感情の側面から支えるのが、この二句なのではないか、陸機は、これまでと変わらぬ友情を捧げる意味で、わが故郷の谷の蘭のようなあなたよ、と呼びかけているのだ、と。このように考えたとき、筆者が覚えた「段差」は自ずと解消されてゆく。

それは同時に、もう一つの、彼らの間に横たわっていた「段差」が、そもそも存在していなかったことをも想わせながら、解消されていることを告げている。「段差」などという生易しいものではなかったはずであるが、西晋王朝による一統後、出身の南北によって生じていた障壁が彼らの間には存在していなかったことを、わが故郷の谷の蘭のようなあなたよ、という表現で結ばれるこの詩は物語っているように思われるのである。

陸機から潘尼に贈られた谷と蘭の表現は、これ自体が精一杯の、深い親愛の情の表出にほかならないのであり、それを最もよく受け止めることができたのが、詩を贈られた潘尼その人であった。

おわりに

かつて吉川忠夫氏は「注釈を読むことは実にたのしい仕事である。[一七]」と書かれた。これは経書や史書の注疏などについてのことであるが、注釈を「たんに手段としてのみ存在するのではない。注釈者が原典をどのように読んだのか、そこになにを読みとったのか、あるいはなにを仮託したのか、つまりそれは注釈者と原典作者とのかかわりあいを示す記録としても存在する」ものとして読み得るのは、本稿で取り上げた、詩歌作品に対する現代の注釈においても同様であろう。

注釈を読むことは楽しい。こつこつと蓄えられる語釈、丁寧な注釈には圧倒され、畏れを抱くことになるが、それは取りも直さず読みの醍醐味を教えられるということである。注釈のない作品とどう向き合えばよいのかも示してくれる。その一方で、注釈を施すことは難しい。関わる機会を与えられて挑んでみても、すっかり分かったということにはならず、自らの注釈にはいつもどこか心許なさが残る。字数をはじめとする種々の制約を受けることもある。力不足に頭を抱えるばかりである。

ただ、それでも注釈をすっかり抛り出してしまうことはできない。注釈を施すという営みは、言ってみれば斯学の根幹であり、大道である。何より、本稿もまた先行する諸氏の注釈の恩沢に大いに浴している。精読の成果は注釈をなすことで表されなければならない。

注釈は先人の精読の精華であり、後生の読みのよすがとなるのである。

しかし、注釈に寄りかかり過ぎてはいけない、畏敬の念を抱きながらも注釈と対話する姿勢を忘れてはいけない、と思う。これは、覚えた違和感を頼りに、今回迷いながら読んだ、読み迷ったなかでの、偽らざる実感であり、自戒でもある。こちらが対話することを忘れたときに、注釈もまた黙して語らなくなってしまうのだ。あらためて吉川氏の言葉を借りれば、注釈は、「注釈者が原典をどのように読んだのか、そこになにを読みとったのか」が示された「記録」である。そうであるならば、この「記録」を丁寧に読むことで、注釈者の思考の軌跡が辿られれば、注釈は深く物語り始めるはずである。詩について言えば、作品それ自体の読みに注釈の言葉を重ねてゆくと、ごとりと音を立てて動き出す、あたかも詩が発軔するがごとき瞬間が訪れることがある。詩の奥に多少なりとも手が届いた気がした瞬間は実に楽しいものだ。古い注も、新しい注も、注釈が存在していることは恵まれたことである。それは、しばしば、詩を読むことの醍醐味と呼び得る瞬間をもたらしてくれるものとして存在しているのだが、ただ存在しているのではない。われわれとの対話を待つものとして存在しているのである。

《注》

(一) 潘尼の「答陸士衡詩」が二十句から成ることを考えると、全句揃っていない可能性は拭いきれないが、句数的に半分となる六句までとそれ以降で換韻していることも踏まえて、全十二句の作品として扱うこととする。

(二) 佐藤利行「二陸と潘尼」(『安田女子大学紀要』二十巻、一九九二年)。

(三) 興膳宏氏は、『亂世を生きる詩人たち　六朝詩人論』の「あとがき」のなかで六朝文学研究の難しさに触れて、「だから、六朝文學のもとの姿を正確に知ることは、文獻資料の上だけからすればほとんど不可能なのである。といって、これからの六朝文學研究について、私がそれほど悲觀的だというわけでもない。ただ、資料の空隙を補うに足る豐富な想像力と鋭利な論理とが、戰略上の必要條件であることだけはいっておきたい。」と述べておられる(研文出版、二〇〇一年、六〇三頁)。精読について考える際にも拳拳服膺すべき言葉であろう。

(四) 後で触れる楊明『陸機集校箋』(上海古籍出版社、二〇一六年)にも「集評」があるが同様であり、筆者も他例を見出せていない。

(五) 「自得」については、張少康・劉三富『中国文学理論批評発展史(下)』(北京大学出版社、一九九五年)に「说明情和理都源于人的性情，并不是互相对立的。他所谓“自得”，即是指诗中之理要发自内心真情，如果不是发自内心真情，那么不要说以理语入诗，就是描写花鸟禽虫，也会情物两乖，花鸟禽虫反而会“累情尤甚”。」とあるのを参考にした(二九八―九頁)。

(六) 校注を施した書籍以外にも、陸機の文学全体について論じた研究書や論文がある。わが国のもので言えば、高橋和巳「陸機の伝記とその文学」(『中國文學報』第十一・十二冊、のち、『高橋和巳作品集9』「筑摩書房、一九七二年」)、興膳宏『潘岳　陸機』(筑摩書房中国詩文選10、一九七三年)、佐藤利行『西晋文学研究――陸機を中心として』(白帝社、一九九五年)などが代表的なものとして挙げられよう。ちなみに、管見の限りでは、「贈潘尼詩」に関する専著論考はない。

(七) 点校本であり注釈書ではないが、校語が参考になる(「贈潘尼」には校語は施されていない)。

（八）初、陸機入洛、欲爲此賦、聞思作之、撫掌而笑、與弟雲書曰、「此間有傖父、欲作三都賦、須其成、當以覆酒甕耳」。及思賦出、機絶歎伏、以爲不能加也、遂輟筆焉。〔晋書巻九十二　文苑列伝　左思〕

（九）鄭箋にも「嚶其鳴矣、遷處高木者、求其友聲。求其尚在深谷者、其相得則復鳴嚶嚶然」とあり、友人を求むる声だと解されている。

（一〇）劉氏注は詩の「蘭」を「蘭花」としているが、これは実は本質的な問題を含んでいる。「蘭花」とするか、「蘭草」とするかによって、「蘭」をいかなる植物として比定するかが異なってくるからである。

（一一）毛詩曰、靜言思之。又曰、出自幽谷。楚辭曰、臨深水而長嘯。爾雅曰、山小而高曰岑。〔文選巻二十八　陸機「猛虎行」李善注〕

（一二）『世説新語』尤悔篇に「陸平原河橋敗、爲盧志所讒、被誅。臨刑歎曰、「欲聞華亭鶴唳、可復得乎」。」とあるのがよく知られる。このほか、『藝文類聚』巻六十八が引く東晋裴啓の「裴子語林」にも「陸士衡爲河北督、已被閒構、内懷憂懣。聞衆軍警角鼓吹、謂其司馬曰、「我今聞此、不如華亭鶴鳴」。」と見える。

（一三）陸機や陸雲にとっての呉郡や華亭については、馬栄江『呉郡二陸文学研究』（社会科学文献出版社、二〇一四年）第二章「二陸詩文的地域研究」を参照。

（一四）小南一郎『楚辞とその注釈者たち』（朋友書店、二〇〇三年）第四章「王逸『楚辞章句』と楚辞文藝の伝承」参照。

（一五）ここでは仮に詩題に「贈」字等を含むものを贈答詩としているが、左思が詠じた「贈妹九嬪悼離詩」「悼離贈妹二首・其二」については、いわゆる贈答詩と性格が異なると考えて含めなかった。

（一六）於穆同心、如瓊如琳。我東日徂、來餞其琛。彼美潘生、實綜我心。探子玉懷、疇爾惠音。〔芸文類聚巻三十一　陸機「答潘尼詩」〕

（一七）『正史三国志2』（ちくま学芸文庫「解説――裴松之のこと」）。のち、『読書雑志』（岩波書店、二〇一〇年）所収。